

感謝された援助者を目撃することの効果

蔵 永 瞳*・後 藤 祐 起**

アブストラクト邦訳

本研究では、間接互惠関係のダウンストリームにおける感謝の役割について検討した。具体的には、ある援助者が被援助者から感謝された／されなかった場合について、目撃者による援助行動を比較するシナリオ実験を実施した。目撃者による援助行動としては、遺失物を拾って届けるという行為を取り上げた。これにより、目撃者が援助者に自ら接触し援助行動をとるかについて検討することができた。予備実験1、2でシナリオ等について検討を行なった後、本実験を行った。その結果、感謝された援助者は目撃者から援助行動を受けやすいことが示された。また、感謝された援助者は、社会性や向社会性が高く、浅薄性が低い印象を与えることが示された。これらの結果は、感謝が間接互惠のダウンストリームに関与していることを示唆するものであった。

Effects of witnessing helper receiving gratitude

Hitomi KURANAGA・Yuki GOTO

Abstract

This study investigated the role of gratitude in the downstream mechanism of indirect reciprocity. Specifically, we designed scenario experiments comparing witnesses' helping behavior when one helper was gratified by the recipient and the other was not. In the scenarios, picking up and returning the lost item was the witness's helping behavior. This allowed us to test whether witnesses would approach and help themselves. We conducted preliminary experiments 1 and 2, improving the scenario and other aspects. Thereafter, the main experiment was conducted. The results showed that helpers who received gratitude were more likely to be helped by witnesses. It also indicated that helpers who received gratitude were perceived as more sociable, prosocial, and less shallow. Consequently, these results suggest that gratitude contributes to the downstream mechanism of indirect reciprocity.

キーワード：Gratitude, Help, Indirect reciprocity, Downstream, Witness

問題

我々は、他者に助けてもらったとき等、他者と関わる中で日々「感謝」という感情を経験する。この「感謝」という感情は、価値あるものを他者が意図的に提供してくれたときに生じるポジティブな感情と定義される (McCullough et

al., 2001)。本研究は、「感謝」を受けた援助者を目撃することの効果に着目した研究である。

二種類の互惠関係

人々の支え合いの関係には、直接互惠関係と間接互惠関係の2種類がある。直接互惠関係とは、二者が互いに援助し合うような「持ちつ持たれつ」の関係を指す (Trivers, 1971)。これに対して間接互惠関係とは、集団内で援助がめぐりめぐった結果、援助者が第三者から援助を受けて報われるような「情けは人の為ならず」と

* 滋賀大学

** 滋賀大学大学院※在学当時

言い表される関係を指す (Nowak & Sigmund, 1998)。そして、間接互惠関係には、ダウンストリームとアップストリームという2種類の機構が存在する。ダウンストリームは、援助者の評判情報を基盤とし、援助者が第三者から援助されやすくなる形で報われるような仕組みを指す。一方、アップストリームは、被援助者が第三者を援助し、その第三者がまた別の者を援助する仕組みを指す。間接互惠関係はこの2種類の機構によって成立している (Nowak & Sigmund, 1998)。

互惠関係における感謝

従来、感謝という感情は、直接・間接いずれの互惠関係にも関与することが示されてきた。例えば、感謝は援助者への返礼行動を促すことが示されている (たとえば Bartlett & DeSteno, 2006; DeSteno et al., 2010; Goei & Boster, 2005; Naito et al., 2005; Tsang, 2007)。このことから、感謝は「持ちつ持たれつ」の直接互惠関係の成立を促していると言える。

また、感謝を感じた被援助者は、援助者に対して返礼行動をとりやすくなるだけでなく、第三者に対しても援助行動をとりやすいことも示されている (たとえば Bartlett & DeSteno, 2006; DeSteno et al., 2010; Moss & Page, 1972; Naito et al., 2005; Otake & Oguni, 2022; Tsang, 2007)。援助行動の伝播を促しているという点で、感謝は、間接互惠関係におけるアップストリームの成立にも貢献していると言える。

さらに、感謝された援助者は、援助の様子の目撃者 (第三者) から援助を得やすくなることが示されている (Algoe et al., 2020)。援助者が間接的に報われやすくなるという点で、感謝は間接互惠関係におけるダウンストリームの成立に貢献していると言えよう。

本研究で着目する現象

以上のように、感謝は直接互惠関係・間接互惠関係いずれの成立にも貢献する感情である。ただし、このうちダウンストリームの成立に関わる部分、つまり、感謝された援助者が目撃者から援助されやすくなるという点に関しては、実証研究の蓄積が未だ少ない。

また、この点について検討した Algoe et al. (2020; Study1-3) では、目撃者の援助行動とし

て「ある仕事を課せられたとき、最低基準以上の仕事をして相手の助けになる」という行動を取り上げているが、ここには、援助者と目撃者の間に相互作用があるという前提がある。しかし、日常生活においては、援助場面の後、援助者と目撃者の間に相互作用があるとは限らない。援助者と目撃者の間に相互作用がない状態から、目撃者が援助者に対して自ら接触し援助行動をとるのかについてはこれまでの研究で検討されていない。ダウンストリームの成立における感謝の関与について明らかにする上では、この点について検討を行う必要がある。

本研究の目的

以上の議論より、本研究では、日常生活における援助場面において、援助者と目撃者の相互作用の前提がない状態の場面を取りあげる。そして、そういった場面でも感謝された援助者が目撃者から援助を得やすいのかについて検討する。なお、本研究においては、シナリオや測定項目等の予備的な検討を行った上で本実験を行う。

予備実験 1

目的

援助者が感謝された／されなかったシナリオの操作について検討する。また、それぞれのシナリオにおける目撃者の援助行動意思の違いについても予備的に検討する。

方法

2017年5月～6月に質問紙によるシナリオ実験を実施した。2種類の質問紙 (援助者が感謝された／されなかったいずれかの内容) のうち、いずれか1種類をランダムに配布することで実験条件への割付を行った。

質問紙は、援助場面のシナリオ (感謝された／されなかった) を呈示した後、それについて質問項目への回答を求め、最後に回答者の性別、年齢を尋ねるものであった。

シナリオは、道案内の様子を目撃した内容とした (Table 1)。道案内をとりあげたのは、援助場面における感謝に関する先行研究 (Moss & Page, 1972) で取り上げられており、日常的に多くの人が目撃することのある身近な援助行

Table 1. 予備実験 1 で呈示した援助場面シナリオ

ある日、あなたは本を借りるために図書館に行くことにしました。図書館へ向かって街中を歩いていると、前方のかなり遠くに、地図を大きく広げている人が目に入りました。その人は、どうやら道に迷っているようです。そのとき、その迷っている人のところにやってきて話しかけた人がいました。どうやら道を教えているようです。あなたは近づいていきながらその様子を見ていました。（仮に、道に迷っている人をAさん、道を教えている人をBさんとします。AさんとBさんはどちらもあなたの知らない人であり、どちらもあなたと同性で同年齢ぐらいでした。）

話が終わるとAさんはBさんに対して何度も頭を下げ、「助かりました。本当にありがとうございます。」と言っていました。

その後AさんとBさんは別の方向へ歩いていき、あなたはたまたまBさんと同じ方向へと歩いていきました。あなたがBさんの少し後ろの位置まで来たときに、Bさんが脇に抱えていたファイルから紙が落ちました。その紙はどうやらレポートのようです。Bさんは紙を落としたことに気づいていないようです。

注) 上記のシナリオは、感謝された条件で呈示したものである。感謝されなかった条件では、シナリオの下線部を「話が終わるとAさんはうなずきながら「はい。」とだけ言いました。」とした。

動と考えたためである。このシナリオにおいては、道に迷っていたAさん（被援助者）による感謝表出の有無を操作した。なお、シナリオにおける登場人物（Aさん、Bさん）に関しては、年齢、性別、親密さといった要因が交絡することを防ぐため、回答者と同性・同年齢・初対面とした。

シナリオ呈示後、回答者には大きく2つのことを尋ねた。1つ目は操作チェック項目である。「AさんはBさんに感謝していた」という項目について5段階（1. そう思わない ～ 5. 非常にそう思う）で尋ねた。

2つ目は、援助者（Bさん）に対する援助行動意思である。具体的には、シナリオにおけるBさん（援助者）の遺失物に対する回答者の対応「落ちた紙を拾ってBさんに届けよう」について5段階（1. そう思わない ～ 5. 非常にそう思う）で尋ねた。

結果と考察

感謝された条件で26名（男性13名、女性13名、年齢平均22.538歳、標準偏差6.544）、感謝されなかった条件で22名（男性12名、女性10名、年齢平均22.455歳、標準偏差6.731）の回答が得られた。なお、以降、分析はいずれもHAD ver. 18.002（清水, 2016）を用いて行った。

まず操作チェック項目について、条件間の得

点を比較する t 検定を行った。その結果、感謝された条件 ($M = 4.538, SD = 0.706$) の方が感謝されなかった条件 ($M = 3.182, SD = 1.402$) よりも有意に得点が高いことが示され ($t(29.827) = 4.118, p < .001, d = 1.235, 95\%CI [0.622, 1.847]$)、操作が有効であることが確認された。

つぎに、援助行動意思の得点について、条件間の得点を比較する t 検定を行った。その結果、有意差はみられなかった（感謝された条件で $M = 4.692, SD = 0.679$ ；感謝されなかった条件で $M = 4.591, SD = 0.854$ ； $t(39.899) = 0.449, p = .656, d = 0.131, 95\%CI [-0.429, 0.690]$ ）。なお、両条件とも援助行動意思の得点に天井効果が確認された。

以上より、予備実験1では、援助者が感謝された／されなかったという認識についての操作には成功したものの、援助者が感謝されたか否かによって目撃者の援助行動意思に有意な違いはないという結果が示された。この結果から、ダウンストリームの成立に感謝が関与するとは言えない。ただし、援助行動意思の得点には天井効果がみられ、上記の結果はこれに起因する可能性がある。また、測定項目の回答段階を5段階としたことで、細かな程度の違いを測定できていなかった可能性がある。

予備実験 2

目的

予備実験 1 の方法を踏襲しつつ、シナリオの一部を改変することで、援助行動意思得点の天井効果を解消することを目指す。また、援助行動意思の測定項目の回答段階を増やすことで、予備実験 1 よりも細かな程度の違いを捉えることを目指す。

方法

2017 年 7 月～8 月に質問紙によるシナリオ実験を実施した。実験デザインは予備実験 1 と同様であった (Table 2)。ただし、質問紙で呈示したシナリオの内容は、大きく 2 つの点を改変した。1 つ目は、援助者 (B さん) の遺失物である。予備実験 1 では紙 (レポート) としていたが、この種の遺失は非常に深刻と想定されたために、感謝された／されなかった両条件で拾って届けようという援助行動意思が生じやすかった可能性がある。そのため予備実験 2 では、シナリオにおける援助者 (B さん) の遺失物をキーホルダーとすることで、遺失の深刻さを下げることを試みた。

2 つ目は、回答者自身の時間的切迫の程度で

ある。予備実験 1 においては、援助場面を目撃したのは図書館に行く途中であった描写としていたが、この描写によって、休日等、回答者自身が時間的に切迫していないときに遭遇した場面と解釈され、そのために援助行動意思が生じやすかった可能性がある。そこで予備実験 2 では、援助場面を目撃したのは授業に向かうため急いでいたときと描写し、時間的な切迫度を高めた。

シナリオ呈示後、先の予備実験 1 と同様に、大きく 3 つのことを尋ねた。1 つ目は操作チェック項目である。「A さんは B さんに感謝していた」という項目について 9 段階 (1. 非常にそう思わない～9. 非常にそう思う) で尋ねた。予備実験 1 では 5 段階で尋ねたが、予備実験 2 では援助行動意思得点の測定段階に合わせ、9 段階で測定した。

2 つ目は、援助者 (B さん) に対する援助行動意思である。具体的には、シナリオにおける B さん (援助者) の遺失物に対する回答者の対応「来た道を引き返し、B さんを追いかけてキーホルダーを届けよう」について 9 段階 (1. 非常にそう思わない～9. 非常にそう思う) で尋ねた。

Table 2. 予備実験 2 で呈示した援助場面シナリオ

ある日、あなたは 1 限の授業に向かうために大学へと向かって歩いていました。授業の開始に間に合うかどうかギリギリの時間だったので、あなたは少し急いでいました。

道を歩いていると、前方のかなり遠くに、地図を大きく広げている人が目に入りました。その人は、どうやら道に迷っているようです。そのとき、その迷っている人のところにやってきて話しかけた人がいました。どうやら道を教えているようです。あなたは近づいていきながらその様子を見ていました。(仮に、道に迷っている人を A さん、道を教えている人を B さんとします。A さんと B さんはどちらもあなたの知らない人であり、どちらもあなたと同性で同年齢ぐらいでした。)

話が終わると A さんは、B さんに対して何度も頭を下げ、「助かりました。本当にありがとうございます。」と言っていました。

その後、A さんと B さんは別の方向へ歩いていき、あなたは B さんとすれちがいました。あなたが B さんとすれちがった後に、何かが落ちる音がしました。どうやら B さんのカバンに付いていたキーホルダーが落ちたようです。B さんはキーホルダーを落としたことに気がついてないようで、あなたが向かっている方向とは逆方向にどんどん歩いて行っています。

注) 上記のシナリオは、感謝された条件で呈示したものである。感謝されなかった条件では、シナリオの下線部を「話が終わると A さんは、B さんに対してうなずきながら、「はい。」とだけ言いました。」とした。

結果と考察

感謝された条件で30名（男性15名、女性15名、年齢平均18.567歳、標準偏差0.971）、感謝されなかった条件で32名（男性14名、女性18名、年齢平均19.156歳、標準偏差3.870）の回答が得られた。

まず操作チェック項目について条件間の得点を比較する t 検定を行った結果、感謝された条件（ $M = 8.100$, $SD = 1.373$ ）は、感謝されなかった条件（ $M = 4.906$, $SD = 2.146$ ）よりも有意に得点が高いことが示され（ $t(53.162) = 7.024$, $p < .001$, $d = 1.739$, 95%CI [1.157, 2.321]）操作は有効であることが確認された。

つぎに、援助行動意思の得点について、条件間の得点を比較する t 検定を行った。その結果、条件間で有意な差はなかった（感謝された条件で $M = 7.367$, $SD = 1.829$; 感謝されなかった条件で $M = 7.531$, $SD = 1.741$; $t(59.223) = -0.362$, $p = .718$, $d = -0.091$, 95%CI [-0.583, 0.401]）。なお、予備実験2でもこれらの得点について天井効果がみられた。

以上のように、予備実験2でも、予備実験1と同様、操作には成功したものの、援助者が感謝されたか否かによって目撃者の援助行動意思に有意な違いはないという結果であった。ただし、予備実験2でも援助行動意思の得点には天井効果がみられたため、上記の結果はこれに起因する可能性が残る。

予備実験1・2において「感謝された援助者」を目撃することの効果を示されなかったのは、そもそもその効果自体が小さいためという可能性もある。予備実験2では、感謝された／されなかったことによる細かい程度の違いを検出するため測定段階を細かく設定したが、効果が小さいことが想定される場合は、実験のサンプルサイズについても検討が必要である。

また、「感謝された援助者」を一度目撃することの効果は、ただちに行動意思レベルにまで影響するものではなく、援助者の印象を少し変える程度のものである可能性もある。間接互惠におけるダウンストリームは、援助者の評判情報を基盤とした機構である。このことを考慮すると、ダウンストリームの成立における感謝の役割を明らかにする上では、目撃者の反応につい

て、援助行動意思だけでなく、援助者に対する印象についても検討する必要がある。

本実験

目的

予備実験1・2からシナリオの内容やサンプルサイズについて再検討した上で、「感謝された援助者」が、その目撃者から援助行動を受けやすいかについて検討する。また、ダウンストリームの成立における感謝の役割について詳細に検討するため、援助者の印象という効果変数を追加する。

方法

2018年12月～2月に質問紙によるシナリオ実験を実施した。本実験では、援助行動意思について、中程度の効果量を検出可能な実験デザインをとる。感謝された／されなかった条件の差を検出するにあたり、有意水準5%、検出力0.8のとき、効果量中程度（ $d > .05$ ）を検出するためには、1条件64名が必要であるが、予備実験1・2ではそのようなことを考慮しておらず、事前にサンプルサイズを定めていなかった。本実験では効果量について前述のような検討の上、1条件64名以上として実験を実施した。

質問紙で呈示したシナリオの内容は、予備実験2で使用したものを踏襲しつつ、以下の4点を改変した（Table 3）。1点目は、援助者（Bさん）の遺失物である。予備実験2ではキーホルダーとしていたが、この種の遺失物は、落とし主にとっては思い入れのあることが想像されたために、感謝された／されなかった両条件で拾って届けようという援助行動意思が生じやすかった可能性がある。そのため本実験では、遺失物をポケットティッシュとすることで、遺失の深刻さを下げることを試みた。

2つ目は、回答者自身の時間的切迫の程度である。予備実験2では、急いでいる状況設定を行ったが、本実験ではこの点をより強調するため、授業の最初に課題を提出しなければならないという設定を加えた。

3つ目は、援助の場所を駅のホームとしたことである。予備実験2では、授業に向かう道すがら目撃したこととして描写し、特に場所を記

Table 3. 本実験で呈示した援助場面シナリオ

ある日、あなたは1限の授業（授業の最初に課題を提出しなければならない）に向かうために大学の最寄り駅で電車から降りてホームを歩いていました。授業の開始時間に間に合うかどうかギリギリの時間だったので、あなたは少し急いでいました。

駅のホームを歩いていると、前方のかなり遠くに、駅構内の地図の前で悩んでいる人が目に入りました。その人は、どうやら道に迷っているようです。そのとき、その迷っている人のところにやってきて話しかけた人がいました。どうやら道を教えているようです。あなたは近づいていきながらその様子を見ていました。（仮に、道に迷っている人をAさん、道を教えている人をBさんとします。AさんとBさんはどちらもあなたの知らない人であり、どちらもあなたと同性で同年齢ぐらいでした。2人の話している様子からAさんとBさんはお互い初対面のようにでした。）

話が終わるとAさんは、Bさんに対して何度も頭を下げ、「助かりました。本当にありがとうございました。」と言っていました。

その後、AさんとBさんは別の方向へ歩いていき、あなたはBさん（道を教えていた人）とすれちがいました。そのとき、何かが落ちる音がしたので振り返って見るとポケットティッシュが落ちていました。どうやらBさんのカバンから落ちたようです。Bさんは落としたことに気がついていないようで、あなたが向かっている方向とは逆方向にどんどん歩いて行っています。

注) 上記のシナリオは、感謝された条件で呈示したものである。感謝されなかった条件では、シナリオの下線部を「話が終わるとAさんは、Bさんに対してうなずきながら「はい。」とだけ言いました。」とした。

さなかった。このことで回答者は、同じ大学に通う学生という、比較的小さなコミュニティサイズのメンバーを想定した可能性がある。このような、個人が特定されやすく自身の評判が強く意識される場では、目の前の他者が感謝されたか否かに関わらず、援助行動意思が生じやすかった可能性がある。そこで本実験では、援助場面を駅のホームと明示し、小さなコミュニティサイズが想定されにくい状況設定を行った。

4つ目は、AさんとBさんの関係性について明記した点である。予備実験1・2では、Aさん（被援助者）・Bさん（援助者）と回答者が初対面であることについては明記したものの、Aさん（被援助者）とBさん（援助者）の関係性については明記していなかった。そこで本実験では、Aさん・Bさん・回答者の関係をいずれも初対面と明記した。

シナリオ呈示後、回答者には大きく3つのことを尋ねた。1つ目は、援助者が感謝されたかどうかについての認識（操作チェック項目）である。この質問は予備実験2と同様であった。2つ目は、Bさん（援助者）の印象である。「消極的な・積極的な」といったSD法による20組の項目（林、

1978）について、7段階（1. 非常に～7. 非常に）で測定した。3つ目は、援助行動意思について尋ねるものである。「来た道を引き返し、Bさんを追いかけて、ポケットティッシュを届けよう」という項目について、9段階（1. 非常にそう思わない～9. 非常にそう思う）で尋ねた。

結果と考察

感謝された条件で79名（男性35名、女性44名、年齢平均18.564歳、標準偏差1.473）、感謝されなかった条件で86名（男性34名、女性52名、年齢平均18.384歳、標準偏差0.597）の回答が得られた。

操作チェック項目について条件間の得点を比較する t 検定を行った結果、感謝された条件（ $M = 8.266$, $SD = 1.737$ ）は感謝されなかった条件（ $M = 5.791$, $SD = 2.322$ ）よりも有意に得点が高いことが示され（ $t(156.737) = -7.792$, $p < .001$, $d = -1.194$, 95%CI [-1.525, -0.864]）、操作は有効であったことが確認された。

つぎに、援助者（Bさん）の印象を測定した20項目について因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行った。対角SMC平行分析の結果か

Table 4. 援助者に対する印象についての因子分析結果

I. 向社会性 ($\alpha=.812$)						
不親切な	—	親切的な	.896	-.023	.178	.021
感じのわるい	—	感じのよい	.785	-.038	.152	-.151
親しみやすい	—	親しみにくい	-.669	-.007	.096	.169
沈んだ	—	うきうきした	.515	.244	-.161	.096
非社交的な	—	社交的な	.508	-.132	-.121	.155
責任感のある	—	責任感のない	-.485	.117	.103	-.013
分別のある	—	無分別な	-.446	-.139	-.017	.140
II. 非社会性 ($\alpha=.726$)						
人のわるい	—	人の良い	.145	-.834	.171	.102
心の広い	—	心のせまい	-.068	.736	-.090	.124
積極的な	—	消極的な	-.032	.540	.230	-.325
なまいきでない	—	なまいきな	.089	.504	-.013	.273
にくらしい	—	かわいらしい	-.243	-.481	-.190	-.088
ひとなつっこい	—	近づきがたい	.098	.396	.113	.044
III. 消極性 ($\alpha=.774$)						
自信のない	—	自信のある	.202	.065	-.699	.098
恥じしらずの	—	恥ずかしがりの	.218	.117	.581	.135
堂々とした	—	卑屈な	-.318	.004	.580	.043
無気力な	—	意欲的な	.321	-.140	-.381	-.132
IV. 浅薄性 ($\alpha=.661$)						
軽率な	—	慎重な	.059	.050	.087	-.646
気長な	—	短気な	-.089	.046	.150	.606
重厚な	—	軽薄な	.025	.095	.119	.518
因子間相関			I	II	III	IV
	I	—	-.620	-.514	-.444	
	II		—	.275	.374	
	III			—	.117	

注) 各項目の得点は、左右両端に位置する言葉について、それぞれ、太字になっている方の印象が強い程得点が高くなるよう得点化した。

ら4因子解が採用された。その結果を Table 4 に示す。それぞれ高く負荷する項目の内容から、向社会性、非社会性、消極性、浅薄性と名付けた。

援助者への印象について、先述の因子分析で因子負荷量が負であった項目について逆転処理を行い、4 因子それぞれ得点化を行った後、条件間の得点を比較する t 検定を行った。その結果、消極性については条件間の差が有意ではなかったが（感謝された条件で $M = 2.816$, $SD = 0.767$, 感謝されなかった条件で $M = 2.881$, $SD = 0.790$; $t(162.509) = 0.531$, $p = .596$, $d = 0.082$, 95%CI [-0.222, 0.386])、他の3変数については条件間の差が有意であった。具体的には、感謝された条件の方が、感謝されなかった条件よりも、向社会性が高く（感謝された条件

で $M = 5.593$, $SD = 0.619$, 感謝されなかった条件で $M = 5.234$, $SD = 0.848$; $t(155.240) = -3.214$, $p = .002$, $d = -0.478$, 95%CI [-0.787, -0.170])、非社会性が低く（感謝された条件で $M = 2.333$, $SD = 0.618$, 感謝されなかった条件で $M = 2.605$, $SD = 0.819$; $t(157.228) = 2.413$, $p = .017$, $d = 0.370$, 95%CI [0.063, 0.677])、浅薄性が低い（感謝された条件で $M = 3.367$, $SD = 0.681$, 感謝されなかった条件で $M = 3.447$, $SD = 0.869$; $t(159.093) = 2.187$, $p = .030$, $d = 0.336$, 95%CI [0.336, 0.030]) という印象であった。この結果は、援助者が感謝されることで、目撃者は援助者に対して、思慮に富み、社会性があり、熟考する人であるような印象を持つ傾向を示している。本実験で、目撃する援助として取り上

げた援助は道案内であったが、そういった援助が感謝されていることは、道案内の援助が成功したものと推測されるだろう。そういった援助が成功していることは、援助者が思慮に富み、社会性があり、熟考する人であることを期待させるのかもしれない。

援助行動意思の得点については、まず天井効果について検討した。両条件における得点は、感謝された条件で $M = 7.316$, $SD = 1.857$ 、感謝されなかった条件で $M = 6.360$, $SD = 2.259$ となり、全体的に得点は高い傾向があるものの、感謝されなかった条件でのみ天井効果がない結果となった。つぎに、条件間の得点を比較する t 検定を行った結果、援助者が感謝された条件の方が、感謝されなかった条件よりも有意に援助得点が高いことが示された ($t(161.074) = -2.979$, $p = .003$, $d = -0.458$, 95%CI [-0.766, -0.150])。このことは、援助者が感謝されることで、目撃者から援助を受けやすくなることを示唆している。

総合考察

本研究では3つの実験を行った。予備実験1・2ではいずれも、援助者が感謝されたか否かに関わらず、目撃者は援助者を援助する傾向が見られた。この点に関して、本実験では、シナリオや効果の測定方法、サンプルサイズ等の改変を行った。その結果、本実験では、感謝された援助者が目撃者から援助を受けやすいことが示された。

また、本実験では、援助者の印象についても検討を行った。その結果、感謝された援助者は、思慮に富み、社会性があり、熟考する人である等、全体的にポジティブな印象を持たれやすいことが示された。これらの結果は、感謝された援助者ほど評判が良くなることを示唆している。感謝はダウンストリームの成立に関与していると言える。

本研究の結果は、感謝された援助者が目撃者から援助を得やすいという先行研究 (Algoe et al., 2020) と同様と言える。ただし、Algoe et al. (2020) では、目撃後、援助者と目撃者の間に相互作用があるという前提があった。これに対

して本研究では、目撃者の援助行動として「遺失物を拾って届ける」という援助行動を扱うことで、援助者と目撃者との間に相互作用がない状態であっても、目撃者が自ら援助者に接触し援助行動をとるかについて検討した。本研究の結果から、目撃者は援助者に対して、思慮に富み、社会性があり、熟考する人であるというポジティブな印象を抱き、自ら援助者に接触して援助行動をとることが示された。感謝は上記のような状況であっても、ダウンストリームの成立に関与していると言える。

しかしながら、本研究では、今後検討すべき課題も残された。その1つは、感謝がダウンストリームの成立に関わる条件についての更なる検討である。本研究において、援助者 (Bさん) は、感謝されたか否かという以前に、道案内という形で他者を援助した人であった。他者を援助している様子を目撃すれば、それだけで援助者の印象は良くなり、そういった援助者に対して目撃者は援助をとろうとする、つまりダウンストリームは成立する可能性がある。それでも、目撃者が援助行動をとるか迷う余地があるような場合に「感謝された援助者」とであるという情報が行動の選択を左右するのかもしれない。予備実験1・2と本実験とで、目撃者の援助行動意思について結果が異なっていたのは、このことに起因する可能性がある。本実験で用いたシナリオは、予備実験1・2と比べ、目撃者による援助行動がどの程度相手の役に立てるかが曖昧であったり、援助行動をとることが負担であったりと、援助行動をとるかどうかの判断を目撃者自身が迷うような要素があった。そのような場合に、相手が「先ほど感謝されていた人である」という情報が援助行動をとるか否かの判断の手掛かりになる可能性がある。

また、本研究では目撃した相手を同性・年齢・初対面としたが、これらの要因によって感謝の働きは異なる可能性がある。「感謝された援助者」が援助を受けやすいという現象の成立条件等について、今後詳細な検討を行う必要がある。

もう1つの課題は、ダウンストリームにおける感謝の効果の大きさについての検討である。本研究において、予備実験1・2では、感謝されたか否かによって援助行動意思に有意な効果が

なかった。また、本実験においては有意な効果は見られたものの、その効果量は中程度以下であった。日常生活で「感謝された」様子を一度目撃することの効果は相対的に小さなものなのかもしれない。ただし、私たちは日々生活する中で、一日に何度も援助の様子を見る上、同一人物と長期的に付き合う中で、その人物が他者を援助する様子を何度も目撃するといった経験もするだろう。そういった積み重ねの効果を想定すると、ダウンストリームにおける感謝の効果は決して小さくはないのかもしれない。

本研究ではこれらのことについて実証的な検討まで至らず、可能性を指摘するにとどまるが、今後はこれらのことについて、より厳密な検討が求められる。そういった検討を重ねることで、感謝がダウンストリームの成立に関して、どのような場合にどの程度関与するのか明らかにしていく必要があるだろう。

引用文献

- Algoe, S. B., Dwyer, P. C., Young, A., & Oveis, C. (2020). A new perspective on the social functions of emotions: Gratitude and the witnessing effect. *Journal of Personality and Social Psychology*, 119, 40-74.
- Bartlett, M. Y., & DeSteno, D. (2006). Gratitude and prosocial behavior: Helping when it costs you. *Psychological Science*, 17, 319-325.
- Clark, R. D. (1975). The effects of reinforcement, punishment and dependency on helping behavior. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 1, 596-599.
- DeSteno, D., Bartlett, M. Y., Baumann, J., Williams, L. A., & Dickens, L. (2010). Gratitude as moral sentiment: Emotion-guided cooperation in economic exchange. *Emotion*, 10, 289-293.
- Goei, R., & Boster, F. J. (2005). The roles of obligation and gratitude in explaining the effect of favors on compliance. *Communication Monographs*, 72, 284-300.
- Grant, A., & Gino, F. (2010). A little thanks goes a long way: Explaining why gratitude expressions motivate prosocial behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 98, 946-955.
- 林 文俊 (1978). 対人認知構造の基本次元についての一考察 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科), 25, 233-247.
- 蔵永 瞳・樋口 匡貴・福田 哲也 (2018). 感謝された後に向社会的行動が起こるまでの心理過程 心理学研究, 89, 40-49.
- Otake, K. & Oguni, R. (2022). How Does Gratitude Promote Prosocial Behavior? Developmental Differences in the Underlying Motivation. *Japanese Psychological Research*. <https://doi.org/10.1111/jpr.12432>
- 清水 裕士 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD : 機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案 メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73.
- McCullough, M., Kilpatrick, S., Emmons, R., & Larson, D. (2001). Is gratitude a moral affect? *Psychological Bulletin*, 127, 249-266.
- Moss, M. K., & Page, R. A. (1972). Reinforcement and Helping behavior. *Journal of Applied Social Psychology*, 2, 360-371.
- Naito, T., Wangwan, J., & Tani, M. (2005). Gratitude in university students in Japan and Thailand. *Journal of Cross Cultural Psychology*, 36, 247-263.
- Nowak, M. A., & Sigmund, K. (1998). Evolution of indirect reciprocity by image scoring. *Nature*, 393, 573-577.
- Tsang, J. (2007). Gratitude for small and large favors: A behavioral test. *Journal of Positive Psychology*, 2, 157-167.

付記

本論文の一部は、第一・第二著者が平成 29 年日本心理学会第 81 回大会で発表した。また、本論文は第二著者が平成 30 年度に滋賀大学教育学研究科に提出した修士論文のデータを第一著者が再分析し、執筆したものである。